第５回高知県教育振興基本計画検討委員会の議事概要

１　日　時　　平成２１年２月２０日（金）　１３：３０～１６：３０

２　場　所　　高知県教育センター　分館　大講義室

３　出席者　　○委員：　松永委員長、岩塚副委員長、菊川副委員長、浅野委員、加藤委員、公文委員、高地委員、筒井委員、時久委員、濱川委員、細川委員、古谷委員、森委員、村岡委員、山本委員、横田委員

○県教育委員会等：中澤教育長、教育委員会事務局各課長、教育センター所長、各教育事務所長（代理含む）、心の教育センター所長、他教育委員会事務局職員

４　概　要　　（意見交換）

委員長　　前回までの意見等、また、前回の委員会後、各会場ごとの教育懇談会の概要が事務局から送られてきたが、そのことも含めて質問や意見をお願いしたい。

委員　　前回の検討委員会の資料にあった「国公立大学への合格者数の増加は、頑張った成果ではなく、生徒数が減少しているのに国公立大学の定員が減っていないという社会変化によるものではないか」と発言し、それについての資料を作ったので配る。推測できる資料として、「四国内の私立大学の定員割れ数」と、「県立高校の国公立大学合格者数」の相関グラフを作った。軸が１０倍違うが、両方伸びているので相関があるのではないかと考える。

委員長　　このグラフは、一見、相関があるようには見えるが、少子化が進行し、全体として大学に入りやすくなっている結果ではないか思う。

委員　　教育懇談会で、特に高知会場では、特定のイデオロギーを持った人が会場に来て、あたかも個人の意見であるかのように発言し、会場の雰囲気を変えてしまうというのは、組織暴力だと思う。そういう人たちがあたかも、保護者や一般県民のような意見を言う、懇談の場で組織暴力が行われており、冒涜されていると思う。（アンケートにもそういう意見が出ていた。）

副委員長　　私も、須崎会場と田野会場に参加した。この２会場では、教育長が１つ１つの質問に丁寧に答えていた。それが、今回の教育懇談会の最大の効果だと思っている。尾崎知事の「対話と実行」と同様に、県民の意見にきちんと耳を傾ける、そしてこちらのメッセージもしっかり伝えるということを実践した場が今回の教育懇談会であったと思う。

しかし、高知会場では、教育長はほとんど答えられていない。先ほどの委員の意見も聞いて、県民の方々や団体の方々との対話をすることは、これからの高知県に求められていることだとつくづく思う。

委員長　　資料４－１と資料４－２を並行して確認し、全体構成について意見をお願いしたい。

委員　　前回より随分見やすくなった。国の教育振興基本計画は１０年間の基本目標、５年間の方針となっている。このたたき台は、１０年間の目標、５年間の方針なのかが分かりにくいので、さび分けが必要ではないか。

例えば、基本目標の「１　心身ともに健康で「徳」を持ったと土佐人を育てよう」という目標が、１０年間の目標なのか５年間の方針なのかが分かりにくい。

事務局　　第３章と第５章に関わる部分であり、文章表現は工夫する。

委員長　　細かい文章表現も含めて意見をお願いしたい。まず、第１章についてどうか。

副委員　　「高知県の教育を取り巻く現状」について、しっかり議論すべきだと思う。私の小さな町でも「生活が苦しい。なんとかしないといけない。教育どころじゃない。」という声をよく聞き、県政浮揚を考えて欲しいという切実な願いも分かるが、高知県の教育を取り巻く厳しい現実をもっと議論して欲しいと思う。

高知県の最も大きな特色は、一極集中で、高知市に県内の４割の子どもが集まっているという特異な現状。私の町は、山間部の小さな町で、過疎化が進み、お年寄りもいなくなっている。人格の完成という目標は同じだが、町と高知市では教育課題は違う。また、高知市と郡部では価値観も違う。だから合併の１つのブロックとしては、高知市と一緒にはできないということになった。課題を共有する前に、もう少し段階を踏んだ議論が必要だと思う。

委員　　私の住んでいるところも過疎化が進んでいる。「豊かな自然環境」はいい言葉だが、生活となると大変である。そういう過疎問題も子どもたちに勉強してもらいたい。

委員　　第１章「高知の教育を取り巻く現状」の中の「（１）少子高齢化や若者等の県外流出の進行」「（３）県民の教育に対する期待レベルが低い状況」「（４）高等教育機関や社会教育施設の現状」は、教育を取り巻く現状。「（２）子どもの教育を取り巻く現状」は、子どもの教育の現状である。順番の整理が必要である。

また、「教育を取り巻く現状」を議論する場合、社会・経済環境があって、教育環境、そして内部環境というのがいいと思う。

環境の強みだけでなく、教育の現状の強み、例えば、子どもたちからすると教員数が多いとか、全国的にみて子どもや学校の良い点を書かないと、元気がなくなる感じがする。

委員長　　高知県の教育の現状について、どういう問題点や課題があるのか、これでよいのかを色々な立場からもっと議論する必要がある。

委員　　高知県の中学校の現状として、進学を目指す人は私立に行く。この現状は大きな問題だと思うが、盛り込まれていないのが気になる。公立中学校が、学力をつけていくためには、できる生徒を更に伸ばすという教育も必要だと思う。できない生徒を救う、下を上げる教育をやらなければいけないというのはよく聞くが、できる生徒を伸ばす教育をするという声を聞かない。そのことも、保護者が私立に行かそうと思う要因ではないか。

委員　　新聞報道にあった「教員の増員」を教えて欲しい。

事務局　　参考資料「平成２１年度当初予算のポイント」にあるが、報道されているのは、正規の教員を増やすのではなく、中学校に教員補助員をおくということ。

高知市に対しては、Ｐ３「２　目標達成のための新たな「しかけ」の導入と徹底」の「（１）高知県・高知市連携による授業と予習・復習（宿題）のサイクルを定着させる仕組みづくり」の「①本県公立中学校の生徒数の３７％を占める高知市立中学校での授業と予習・復習（宿題）のサイクル化を支援」の中で、大量に教員補助員を配置する。

また、Ｐ１「（１）学校・学級改革」の中の二つ目の４行目に「授業での個別学習支援や放課後の補充学習支援等を行う非常勤講師、３５人を６０人」となっているが、高知市以外でもこのような様々な対応をする。トータルとして相当数の教員以外の教員の補助者を置くことにしている。

委員　　先ほどの「できる生徒を更に伸ばすという教育」という発言に関連して、私の子どもは双子で、一人は私立中学校に進学した。一人は公立中学校に進学した。公立中学校に行った子どもは、周囲がのんびりしていること、クラブと勉強との両立が難しくて学力が思うように伸びず、勉強嫌いになっていった。私立中学校に行った子どもは、勉強はそれほど好きじゃなかったが、周囲が勉強をするので「しなければ自分が困る」という意識ができ、２人が全く違った方向に進み始めた。

私立に行った子には、中学校の時から学校の授業や先生の話の中で将来に向けての意識や進むべき道が示された。公立に行った子には、目の前の授業や勉強は頑張らないといけないという話が主で、生活面や将来に向けての話はあまりされなかった。そうすると、２人の差がどんどん大きくなり、もちろん高校でも差が出た。

学校で、将来何になりたいか、何に進みたいか、この職業に就くにはどういう方向（大学や資格）に進めばよいかというような目的を示してもらえたら、子供は進んでいけると思う。ただ漠然と「授業を真面目に受けなさい」「勉強を頑張りなさい」「家庭学習をしなさい」と言っても今の子どもには難しい。将来の目的や目標意識をしっかりと話してくれることが学校で行われたら、子どもたちの意識は、少しは変わってくると思う。

委員　　環境面に書かれているが、高知県は非常に体験活動に適した教育環境を持っている。

もうひとつ、今度の学習指導要領等で「表現」ということが大事にされている。表現力という部分では、高知県は非常に強い表現力をもっている。それを立証できるデータが無いが、よさこい祭り（踊り）も含めて、制約にとらわれず発展し続けるだけのエネルギーを持っている。それが表現力にもつながると、現場にいて感じる。

委員　　教員が困っていることは、子どもに目標や意欲が十分に無いこと。人との関わる力やコミュニケーション能力が極端に劣る。元気な子どもたち、いきいきと働き生活する大人に育てるために小学校教育をどうすれば良いかということが一番の悩みで、そこに狙いを定めて取り組んでいる。

保護者と関わる中で困ることは、保護者の常識にばらつきがあり、学校でイメージして伝えたことが伝わりにくくなっている。そのため、学校でやっていかなければならないこ

とがたくさんあり、教員にとって今までのやり方では通用しない子どもたちが増えてきた。
　また、発達障害の子どもも増えている。教員がこうしなさいと言っても、また、授業を工夫しても、それが通じない子どもたちがクラスに数人いることもあり、教室として成り立つことが難しいこともある。いわゆる通常学級の中における特別支援教育が、学校における大きな課題の一つ。
　資料のまとめ方としては、このとおりだとは思うが、現実と結びつかない、（少子化や、生活保護率が高くなってきたとか、数値的なものなど）捉えにくい部分があるので、説明が必要だと思う。

委員長　　大学においても同様。大学を卒業した学生に一番欠けていることは、学力面もあるが何よりも人間として、社会人として持つべき意欲、コミュニケーション力、人との関わり力。
　従来の大学は、「そんなことは大学教育の課題ではない」「本来そういうものをもって入って来るのが大学だ」と言ってきた。５０％の生徒が大学に進学している今、大学教育はそれに対応するあり方を模索しないといけないとこの１０年間やってきたが、まだ大学全体がそういうようになっていない。
　親の問題だとか、高校までの問題だとか、高校では中学校までの、中学校では小学校の、というようなことを言っても進まないという現状を認識して、それぞれのところで何をやるのかということが必要だと思う。

委員　　ここにはマイナス部分がたくさん出ているが、私は、子どもたちに希望を持っている。それは、高知の子どもたちは火をつけたらすごいということ。例えば、学校では不登校の子、教室に入らない子、教員のいうことも聞かない子、体育祭の練習もまともにはしない子はたくさんいる。でも、体育祭などの当日は素晴らしく、よさこいそのもの。火がつくと本当に素晴らしい。ただし継続力がないから日常につながらないという特徴をもっている。そこをどう活かすのか。その気持ちを日常の学習などにどう活かしていくのかは、大人の私達に工夫がいる。
　私が生まれ育った熊本県では、火をつけてもなかなか燃えないが、継続力はある。高知県の良さや特徴、どう火をつけていくか、燃やし続けるためにどうするかがベースになるのではないか。このことは、後の章に出てくると思うが、「教師の質」や「組織」にも関わってくる。子どもたちは、とても良いものをもっていると思う。

委員　　資料４－２のＰ１５「高等教育機関や社会教育施設の現状」で全国に比べて低い地元大学の進学というデータは、高知県内の高等教育機関は極めて施設が不十分だからよくしようということか、あるいは、県内の大学に進学する者が少ないということを問題にしているのか。この数字が少ないということに意味があるのか。
　昔から言われている、文系花形の法学部と理系花形の工学部が、高知県には長い間なかった。それがひとつの背景になっていると思う。子どもたちに、夢・目標をもって頑張りなさいと言う時に、この小さな高知県から、県内に無い学部学科に自分の道を求めて進学をするということは、高知県にとって少ないほどいい数字かもしれない。
　もう一点、他の都道府県は、学力向上でなく、学力低下歯止め競争をしている。間違いかも知れないが、他の都道府県の学力が高いので、高知県も負けずに学力向上を頑張ろう

という議論で話が進んでいいのか。

もうひとつ、「土佐の教育改革１０年で具体的な成果が上がらなかった」というのを見て愕然とした。数字成果を言っていると思うが、公教育には風穴が開いたと思うし、学校も、教員の意識も変わった。これは、１０年の成果だと思う。小学校、高校は成果が上がったが中学校はどうしても悪いところが目立ちやすく、立場が弱いと思う。「議論をしたことは良かった。しかし成果は上がらなかった。」という文言をできれば変えて欲しい。

委員長　それに関わっている人達が元気を失うような表現は良くない。土佐の教育改革では、それぞれに苦しみ努力し、成果も上がっている。その評価について、きちんと書きたい。

また、大学はどういう問題があるかという時に、全国の中で特異なかたちであり、地方大学としては非常に特異な構成であることは事実。

委員　「（３）県民の教育に対する期待レベルが低い状況」の中で、徳島県と比べて「期待が低い」という表現は非常に婉曲なやわらかい。県民運動にするためも、大人達がもっと頑張らなければいけないことを伝えるためにも「意識が低い」とはっきり書いてはどうか。

（休憩）

委員長　第２章から第４章までを分けずに議論したい。

委員　「教育にいかせる高知県の強み」の中に「豊かな感性」、この「感性」について、高知県の人はすごいものを持っていると思うが、それを活かせる場が少ない。「マンガ甲子園」くらいしかないと思う。

建築のパーツの完成予想図を描くコンクールや全国高校料理大会でも、高知県の人はその感性で優秀な成績を修めていた。感性が必要とされる教育プログラムを洗い出したらたくさんあると思うが、それを活かせる環境が整備されていない。「強み」ではなく、「強みを活かされてないという部分」をクローズアップすべきじゃないかと思う。そうすると、勉学だけじゃない、そういう学問というのは全てオールマイティーに網羅できる。

特に高知県の強みという部分では「感性」を鍛え上げるということをすればいい。そうすることで、色々な波及的効果が出てくると思う。そういう感性をコンピュータと連動させるとエキスパートの道が開ける。

「商業デザイン科」が、前はポリテクにあったが、今は専門学校に一部あるくらいで公教育にはない。企業で商業デザイナーが欲しいと思った時に高知県では十分に養成ができてない。環境を整えることも必要だと思う。

委員　恵まれた自然環境があるので、昔の高知県の子どもたちは、田舎者だがそのうちいい味が出ると居直ることができた。例えば、タイムは伸びなくても、川や海で泳ぐのは平気、という子どもたちが育っていた。そういう自然の豊かさから保障されていた育ちが、最近は保障されていない。

幼児から、長い間蓄積されていくようなものが断ち切られている危機感を感じる。高知県の子どもたちは、野球好きが多いことが平均値を上げているかもしれない。これが学習

の要素が重なった時に、必ず相乗効果で出てくると思う。そういった書き方もして欲しい。
「基本目標」について、最初に「（１）心身ともに健康で徳をもった土佐人に育てよう」はこれでいい。「（３）三つ子の魂百までの幼児教育を」を非常に重要視して欲しい。
今問われているのは、まさに幼児教育。幼児が育つ初期の段階での家庭の躾や習慣という基礎となる部分が欠落をし始めていると感じる。そういう意味で、「（５）家庭における教育を高めよう」や「（６）地域全体で教育にかかわろう」という部分を「（４）各学校で基礎・基本となるような力を確実に身につけよう」より前面に出して発信をして欲しい。

委員　「就学援助制度を充実する」など、「子どもたちの教育をうける権利の保障」という観点が必要。
もうひとつ、今後、子どもの数が減り高等学校の再編統合が出てくると思う。その時に、東部・中部・西部で、普通科、実業科を維持しながら、子どもたちの進学先を保障するという考えが必要であれば、入れておいたほうがいい。
「義務教育の機会均等」と「高等学校の再編整理の方向付け」といった項目も入れる必要があると思う。

委員　全員が大学に行くわけではなく、就職する人も多い。「重点目標」とまでは言わないが、就職に向けた高校生の育成に努めるということも必要。例えば、人と会えばあいさつをする、笑顔で受け答えをするというような「就職に向けての立派な社会人の育成」、「大学と就職」というような書き方をしたらもっと良くなると思う。

委員　資料４－２のＰ１３、１４の表で分かるように、学校教育に望むことの意識が低いことが、高知県の問題。小、中、高校でも、「基本的な生活習慣が身につくようにして欲しい。」という意見が出る。本来、家庭がやるべきことで、学校がやるべきことではない。親の意識改革ができてない。これをやらなければ先へは絶対進めないと思う。
それと、幼児教育。保護者の意識は子どもを教育してくれるところではなく、保育所の延長線上という認識にも問題がある。
３人の子どもの担任教員に「うちの子が悪いことをした時、今、教えなければいけないと思った時は、叩いていい。」とお願いをすると、「そんなことをしたら大変。教育委員会や他の保護者に何を言われるかわからない。」と言われた。体罰はいけないが、躾という部分が多ければ良いと思う。そういう教員の自信のなさは教育委員会が育てたのではないかという気がする。教員や親の自信のなさ、教育に対する自信のなさが、どこからきているかを絞らなければ、教育向上にはつながっていかない気がする。
躾について言えば、教員が保護者のお願いを断るということが問題で、そこをもう少し掘り下げて考え、議論しないと教育の向上にはつながらない。点数を上げることは簡単だと思うが、点数を上げることが教育の課題ではないと思う。

委員　資料４－２Ｐ２１の「知・徳・体」だが、高知県の子供は「知・徳・体」とも全国最低レベルで、全てを否定されているような気がする。セットで書かなければいけないのか。「知」については、学力のことは受け止める。「体」は、体力測定結果だろうから受け入れざるを得ない。しかし、「徳」については、問題行動、子どもの苦しい切ない心の問題や

家庭の事情、病理的な問題など様々な事情による不登校、経済的理由により激増をしている中途退学も含めているのであれば、納得がいかない。暴力行為と「徳」を結び付けることについては譲っても良いが、「徳」の無い子がケンカしているわけではない。

教育上使われる言葉で「知・徳・体をバランスよく伸ばす」というのは素晴らしい言葉だが、負の要因として扱う時には、３つ一緒の扱いについて検討して欲しい。

副委員長　　こういう計画は、できるだけ具体的で、シンプルでわかりやすいことが定着につながる。そういう意味で、「第２章　基本的な考え方」、「第３章の基本目標、重点目標」、「第４章　目標達成に向けての、２ 学校・家庭・地域の果たすべき責任と役割」の３つの項目に、だぶりがあるのではないか。例えば、「第２章　基本的な考え方」の「教育を変える」「教育によって変わる」「教育によって変える」は、一般的な考え方の整理としては正しいと思うが、「変わる」と「変える」の違いも含めて、章を起こすほど大きい整理なのかと思う。

国の青少年育成施策大綱の「基本理念」にも「社会的な自立」と「他者との共生」の二つがあったが、「子供を一人前にしていく。社会の中に出して自立して他者と共生して生きていける人間をつくる。」ということが、到達目標ではないかと思う。

また、基本目標「（１）心身ともに健康で「徳」をもった土佐人を育てよう」の項目で、「徳育」を具体的施策にするというのは難しいのではないか。乳幼児期からの体験やテレビ・情報化社会、子どもたちが健やかに育つベースとなる外遊びなど、様々な問題が徳育のベースにあるのではないかと考えると、単に言い聞かせるだけの徳育ではいけない。

もう一点。「（３）「三つ子の魂百まで」の幼児教育を大切にしよう」だが、「乳幼児期」となっていない。乳児期の親子関係が非常に大事だと思う。

「（５）の家庭における教育を高めよう」で、「厳しさと愛情をもって子供としっかり向き合い…」という記述では、「厳しさ」が先に出ている。「躾は愛情の門を通る」というように、躾は愛情の裏打ちがあって躾。子どもを一人前にしたいために、親の優しさ、温かさ、厳しさをしっかり子どもに伝えることが大切。

委員　　資料１のＰ７に、「土佐の教育改革１０年やって、チェック、アクション、改善という仕事の「づめ」が充分でなかった」と事務局が指摘している。私もこの検討委員会の委員として、どうやったらよくなるのかとずっと考えている。改革のＰＬＡＮ・ＤＯはすごいが、そのわりには実行段階での成果が上がってないと感じる。

同じく、Ｐ７前段で、「高知県版の外部評価委員制度をつくり、企業や一般の人々に委員をお願いし、学校をまわって意見をもらうとよいのではないか」と指摘がある。今の教育現場への指導体制では、あまり効率的な成果が上がってないように思う。県教育委員会→市町村教育委員会→教育現場という指導体制は、公務員同士ということも問題ではないか。国は全国一律の指導。高知県の教育は他県と違うことを前提に、独自のものを考えるという視点に立ち、外部の人が教育現場に良いかたちで携わっていくことができないのか。

委員長　　今、提起された問題は、全体に関わる。特にＰＤＣＡ、ＣＨＥＣＫ、ＡＣＴＩＯＮ、ＰＬＡＮ、ＤＯ。この基本計画をつくって、マスコミで発表してどうなるのか。これを誰がどんな形で実践するのか。学校では、県教委などの指導でアクションが起こると思うが、今回の計画は、保護者や地域の問題、あるいは諸団体も含めた県民運動にしなければいけ

ないという議論もあるので、ＤＯをどういう仕組みでやるのかという議論が必要。
第６章では不十分だが、今までの意見を踏まえ、今日はこういう形で出している。次回、もう少し具体的にどうするのかという検討が必要。
合意形成の問題と、ＤＯ、ＣＨＥＣＫの問題は、課題であると思っている。

委員　資料４－２の「基本目標」の中の文言等の部分は、この検討委員会からどこに投げていくのか。県民に投げていくのか。そこをはっきりさせないと、表現が随分変わってくる。

委員長　県民に対して問題提起し、こういう方向でやろうと訴える部分と、行政や学校が施策としてこうしますという部分を、前回から少しずつ整理しているが、まだ不十分。
県の産業振興計画は委員会で検討しているが、知事がマスコミに「行政はこうやります」と発表した。この検討委員会も、県教委や学校、教員、親、社会に対して、メッセージを投げるのかというとそうじゃないと思う。
国が計画をつくって、国の計画を踏まえて各県が計画をつくるというのが最初の出発点。県民に対して施策を出すためのメッセージで、こういう問題がありこういう方向で高知県の教育を変えていこう、実現するために県はこういう計画をします、というものだと私は思っているが、何か意見や、アドバイスをお願いしたい。

委員　資料４－２のＰ２３を見ると、重点目標としてはこういう文言になるのかなと思う。ただ、重点目標の２番目は、死語に近い「徳育」や「知育」という言葉は検討して欲しい。「学力・体力の低迷から脱却し、規範意識を向上させる」という言い方だと少し心が和む。

委員　こういう学校にして、教育をして、地域をつくっていこうというのは分かるが、学校がよくなり教育が充実することが過疎等の地域にとってこれぐらいメリットがある、これが地域の活性化にもつながるという部分が必要ではないか。具体的に言うと、地域校区の小学校や中学校でそれを盛り立てていくという部分があってもいいと思う。
もうひとつは、今後の県教育委員会、教育事務所、市町村教育委員会の教育行政のあり方が必要だと思う。県民に分かりにくい教育行政について、教育委員会自体こうやるというようなものも計画の最後に入れてもいいと思う。

副委員長　最初にキャッチフレーズがある。キャッチフレーズは非常に大事だと思う。
ひっかかっているのは、「学習をする」「教育を受ける」ということが、手段としてどんどん浮上していること。手段は、目的が達せられると止まる。教育風土をつくるということは、生涯学習社会を高知県につくるということ。「教育を楽しむ」「教育を受ける喜びや意義」が目的にならなければいけない。高知県の教育風土をどういうふうにつくっていくのかがもっと議論されるべきだと思う。
基本目標の「（４）各学校で基礎基本となる力を確実に身につけよう」では、基礎的基本的事項は当然つける必要がある。同時に学び方の基礎基本が必要。学ぶことの意義、学ぶことの喜び、この３点セットが学校教育で獲得されるべきである。
第５章では、この「（４）各学校で基礎基本となる力を確実に身につけよう」の施策が一番多い。学校教育に課せられた使命は一番多いということ。学校教育で生涯学習の基礎づ

くり、学校教育の段階で何ができるのかという視点がないといけないと思う。
また、高知県は豊かな自然を使い切っていないのが課題。「活用能力」について、学力・学習状況調査で指摘された。知的なことを確かめたり経験したりする場がなく、知識が知恵になっていない。体験が欠けているということ。
そして、囲う教育が非常に多いのではないか。解き放すということが何故ないかというようなことも踏まえ、高知県の５年、１０年後どういう学習社会をつくっていったらいいかという議論をすることも意味があると思う。
学校教育の使命が、単なる技術知識の獲得だけに終わってしまっていることを心配する。

委員　最初の部分で、「個人、県民の可能性が最大限に発揮される」となっているが、「どういう人をつくりたいのか」がはっきりすれば、各学校段階で取り組むことができると思う。ここに書いてある課題が目標になっては、小さくなって、いくらやっても全然進まないということになる。例えば、保護者に「子どもをどういう大人に育てて欲しいか、小学校教育ではきちっと力のつく授業をし、人とかかわる力や豊かに考えられる力をつける。そのため体験活動で子どもをつくりあげる授業もする」と言うと、保護者はやる気になる。
「変わろう」と言っても、高知県の良さでしか変わらない。高知県の弱い部分の「こつこつ頑張りましょう」と言っても頑張りにくい。それよりは、バーンと爆発するような力で頑張れるところがある。だから、「明るい」「燃え出したらいくらでも力が出る」「くじけない」「火がついたら結構面白がってやる」そういう県民性を活かして頑張ろうという呼びかけであれば、やれるかもしれない。いいものを持った活力のある人達が揃っている。それの力を活かして高知県らしいを工夫して提案していけたらいいと思う。少し遠い５年くらい頑張ってみようと思うようなものを考えていきたいと思う。

委員長　大変重要な問題提起。教育をするのが目的ではなく、教育を通じてどういう人間に育って欲しいのかについて、色々な意見が出た。それを達成するために計画を立てるという話が、充分整理できていないのかもしれない。今日、第４章までの議論を踏まえてたたき台を修正し、次回、第５、６章に焦点を合わせて議論する。
新しいスケジュールに、「４月検討委員会開催（予備日）」を入れた。当初の予定は、３月の末で「中間まとめ」を出し、「パブリックコメント」を受けて、５月と６月に検討委員会を行い７月に策定という予定だったが、次回の議論の進み具合によって、もう一度検討が必要であれば、４月に検討委員会を行いたい。
次回、「中間とりまとめ」を整理し、パブリックコメントを出してもいいと了承されれば、３月で「中間とりまとめ」をするという２段構えでいく。

委員　「第２章　基本的な考え方」「第３章　基本目標」「重点目標」「第４章　目標の達成に向けて」が切れている感じ。「教育を変える」ための基本目標はこんなことがある、そのための重点目標はこう、達成に向けてこんなことがあるという表にしてもらえると分かる。

委員長　資料についての意見、発言できなかったことなどがあれば、ファックス、メール、電話等で事務局に２月末までに送ってもらえたら、次回に反映させる。